

ベルリオーズとミュッセ 『英国の阿片常用者』

Berlioz et *L'Anglais mangeur d'opium* de Musset

余語毅憲

Takenori YOGO

『英国の阿片常用者』について

トマス・ド・クインシー『阿片常用者の告白』の翻案・註釈である「阿片常用者」が収録された、ボードレールの『人工樂園』（一八六〇）が出版される約三十年前のことである。当時十八歳のアルフレッド・ド・ミュッセは「A.D.M.」という署名の下、ド・クインシーの作品を翻訳し、『英国の阿片常用者』という題を付けて既に出版していた（『フランス書誌』一八二八年十月四日号に登記）。ボードレールは、精神科医ブリエール・ド・ボワモンの『幻覚論』の中で、数節程度ではあるが『英国の阿片常用者』に触れていた可能性がある¹。しかし、その段階では「A.D.M.」がミュッセであることを同定出来なかった可能性は大きい。何故なら、当の『幻覚論』には引用された書物の翻訳者に関する情報が一切記載されていないからである²。またこの詩人自身も、一八五七年七月九日付の母への手紙の中で、「『阿片常用者』は、パリでは知られぬ素晴らしい作家の新しい翻訳です」と言い切っている³。

しかしその一方、ミュッセの『英国の阿片常用者』に関してスペルベルク・ド・ロヴァンジュールから調査を依頼されたプーレ＝マラシの回答の中で、二つの興味深い逸話が報告されている。一つは、ボードレールがたまたま「A.D.M.」と署名された『阿片常用者の告白』の仏語訳をセヌ河畔の古本屋で手にしたが、内容が著しく改変されていることに不満を持ち、最終的にこの仏訳本の存在を無視したという有名な逸話である。もう一つは、ネルヴァルやミュッセの友人フランシス・ギシャルデにより、この翻訳者「A.D.M.」がミュッ

¹ Jacques Crépet, « Notes et éclaircissements. Histoire des *Paradis artificiels* », *Œuvres complètes de Charles Baudelaire*, t. III, *Les Paradis artificiels. La Fanfarlo*, Paris, Louis Conard, 1928, p. 291-292.

² Brierre de Boismont, *Des hallucinations*, Paris, Germer Baillière, 1845, p. 368. ちなみに、ブリエール・ド・ボワモンは『幻覚論』第三版（一八六二）において、ボードレールの『人工樂園』中の幻覚に関する考察について言及し、これを賞讃している。

³ *Correspondance de Baudelaire*, Gallimard, coll. Bibliothèque de la Pléiade, t. I, 2^e éd., 1993, p. 411（『ボードレール全集』、阿部良雄訳、筑摩書房、第六巻、一九九三、三一〇頁）。

セであることを知らされたが、ボードレールはこの翻訳作品を凡庸なものと思倣したというものである。「『阿片とハシッシュ』『人工楽園』の副題」という本が刊行された際、ボードレールは寡作の文人ギシャルデ氏にそれを一冊送りました […]。ボードレールに会って礼を言う機会を得たギシャルデ氏は、讃辞を述べた後にこう付け加えたのです。『三十年程は前になりますが、ド・ミュッセがその本の仕事を引き受けたのですよ』。／ボードレールは私にこう言うておりました。『私は純粋な思索により命じられてこの仕事をしたようなものでしたが、ミュッセは五百フランを稼ぐ為にこれに取り組んだのです』⁴。プーレ＝マラシにより報告されたこれらの逸話の中でも、とりわけこのギシャルデに関する逸話の内容の真偽は今一つ定かではない。だが少なくとも、若きミュッセによる「純粋な思索」を欠いた仕事をボードレールが評価しておらず、自身の仕事において参照するに足らないと判断していたことは確かであろう⁵。

『ロンドン・マガジン』誌の一八二一年九月、十月号に初めて発表され、その翌年には同誌の出版元であるテイラー・アンド・ヘシー書店より単行本として刊行された『阿片常用者の告白』は、知識人階級に属するような若い阿片中毒者の手記というスキャンダラスな内容が大きな社会的反響を呼び、当時のイギリスで大成功を収めた⁶。その六年後、ドーヴァー海峡の対岸でこの奇書が大きな話題となっていることを聞きつけたパリのマーム・エ・ドゥロネー＝ヴァレ書店は、フランスでの成功を当て込み、この本の翻訳を弱冠十八歳のミュッセに依頼した。兄のポール・ド・ミュッセがその著『アルフレッド・ド・ミュッセ伝』（一八七七）の中で伝えるところによると、喜んでこの仕事を引き受けたアルフレッドは、実に「一ヶ月で」これを仕上げてしまったらしい。

何も忘れることのないように、ついでながら、余り知られていない初期の出版物の名を挙げておこう。十八歳だったアルフレッドは、マーム氏の書店の為にちょっとした小説を英語から訳す仕事に喜びを覚えた。『阿片常用者』、このようなシンプ

⁴ スペルベルク・ド・ロヴァンジュール宛の、プーレ＝マラシによる一八六四年十一月十三日付の回答状 (Claude Pichois, « Autour des Paradis artificiels. Baudelaire, Musset et De Quincey », dans *Baudelaire. Études et témoignages*, Neuchâtel, À la Baconnière, coll. Langages, 1967, p. 142-143)。

⁵ 詩人ミュッセをボードレールは、例えばこう評価している。「ド・ミュッセ。詩的能力。だが余り快活ではない。 […] それにしても無能な詩人。」 (Baudelaire, *Œuvres complètes*, Gallimard, coll. Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1976, p. 234 [『ボードレール全集』、前掲版、第二巻、一九八四、三九〇頁])。さらに他処でも、彼は辛辣な口調で、以下のように評している。「 […] また女性的で理論を持たぬアルフレッド・ド・ミュッセは、如何なる時代にも存在し得たであろうし、優美に心情を吐露する怠け者以外のものではかつてあり得なかったであろうからだ。」 (Ibid., p. 110 [同書、二五一頁])。

⁶ 当時のイギリス社会におけるド・クインシーの作品の大成功を伝え、その梗概をフランスの読者に初めて紹介したのは、『ラ・パンドール』紙に掲載された匿名記事である (« *Confessions d'un anglais mangeur d'opium* », *La Pandore, journal des spectacles, des lettres, des arts, des mœurs et des modes*, 29 et 30 septembre 1827)。

ルな題名にすることを彼は考えていた。版元が断固として要求してきたのは『英国の阿片常用者』であった。この小冊子は一ヶ月で書かれたのだが、今日では恐らく一冊捜し出すのにもかなり苦勞することであろう。訳者は、余りぞんざいな人間ではないのだが、異国の主人公が見た数々の夢想の中に、描写に富んだベラル氏による解剖学講義が彼に残した思い出のうちの幾つかを挿入してしまった。匿名で刊行されたこの出版物を気に掛けた者などいなかった。続々と刊行される新しい文学作品の洪水の中で、あたかも大海に降る一滴の雨粒の如くに、それは消え去ってしまったのだ⁷。

青年アルフレッドがド・クインシーの原作の中に自分の体験談等を恣意的に付け加えてしまった、という兄ポールからの報告は重要である。実際に『英国の阿片常用者』の中で読むことの出来る幾つかの場面や逸話——空想の中でのマドリッド旅行、スペイン人女性との情熱的な恋愛、死罪を宣告・執行され共同墓地に埋葬される夢、人妻となってしまうていたかつての恋人アンナとの「フランス風の舞踏会」でのドラマティックな再会、そして彼女の夫「C 卿」との決闘、その後の彼女を伴っての逃避行、さらに解剖学の授業でかつて見た死体が亡霊となって阿片による幻覚の中に登場したという話——は、ド・クインシーの原作の中のどこにも存在しない。とりわけ「一八一九年十二月」という日付を持つ医学校でのエピソードは、兄ポールの証言にもあるように、かつて受講した死体解剖の授業でアルフレッドが実際に体験した出来事に基づいたもののようだ。

一八二七年にパリの医学校に入学した青年ミュッセは一年間、ピエール＝オノレ・ベラル氏による解剖学の講義に出席していた。期間としては短かったが、この医学校での体験は多感な時期にあった医学生アルフレッドにとって、ある種のトラウマとなってしまうようである。ポール・フーシェに宛てた手紙でミュッセは、自分の学生生活や解剖の授業に対する不満を、次のようにこぼしている。「僕の抱いている嫌悪感や憂鬱を知らせる為に、だからこうやって君に手紙を書いているのさ。[...]僕はもう何も考える気力がないよ [...]」⁸。さらにこの数行後を読むと、当時の彼の頭の中では、阿片と死との間に何かしらの不吉な観念連合とも呼ぶべきものが、既に成立していたようだということが推察される。「阿片で以て病人をしっかりと眠らせてしまうのさ、この眠りが病人にとって命取りであるに違いない

⁷ Paul de Musset, *Biographie de Alfred de Musset. Sa vie et ses œuvres* [1877], Hébert, 1888, p. 92. ミュッセは一八二八年八月三十一日、ディジョンの地方紙『プロヴァンシャル』に「夢」という詩篇を既に発表していた。この際も「A.D.M」という署名を使用している。しかし、単行本としては『英国の阿片常用者』が彼のデビュー作品ということになる (Frank Lestringant, *Alfred de Musset*, Flammarion, coll. Grandes Biographies, 1999, p. 62)。

⁸ フーシェ宛の「一八二七年」九月二十三日付の手紙 (*Correspondance d'Alfred de Musset, t. I : 1826-1839*, PUF, 1985, p. 23-24)。

と分かっているのにね。僕も自分の魂に同じようなことをしてしまおうかな」。

自分の創作した逸話を恣意的に挿入したばかりでなく、青年ミュッセはド・クインシーのオリジナル・テキストの実に三割近くを削除ないし圧縮してしまった。ピエール・ノルドンの調査によると、ド・クインシーにより語られた自伝的逸話や、阿片の摂取が原因となって生じた症状（肉体的苦痛や精神衰弱等）の報告、作者自身による阿片中毒の治療と養生の経過の詳細な観察、そしてミュッセの創作テキストと噛み合わない部分等が主にその対象となっている⁹。以上のことを鑑みると、『阿片常用者の告白』が蒙った「被害」はかなりのものと言わざるを得ない。ミュッセの『英国の阿片常用者』は、現代の我々から見れば、ド・クインシーのオリジナル・テキストを余り尊重しなかった、かなり自由で大胆な翻案ということになる。

ポール・ド・ミュッセが弟アルフレッドの伝記の中で報告している重要な情報が、これに加えてもう一点ある。それは、『英国の阿片常用者』を当時の新聞雑誌がほとんど取り上げず、初めて上梓した本であるのに訳者本人もこれを終生ほとんど顧みることがなかったという報告だ。ミュッセの死から十年後に、シャルパンティエ書店から彼の全集が兄ポールの編集で刊行される（一八六五―一八六六、全十巻）。しかしこの全集は評判が芳しくなかったばかりか、スベルベルク・ド・ロヴァンジュールなど、ミュッセの作品を愛する読者や愛書家たちから非難の声を多く浴びせられてしまう¹⁰。何故なら、この全集は「完全かつ決定版」と謳われていたにも関わらず、『英国の阿片常用者』も含めた幾つかのテキストを収録していなかったからだ。これについてポール・ド・ミュッセは、この作品が収録されなかったのは原作及び弟の翻訳の質が良くなかったからだ、と全集の解題で弁明することになる。「一八二八年に、マーム氏の書店の為に彼はある一冊の小説、『英国の阿片常用者』[『阿片常用者の告白』を指す]を英語から翻訳したことがある、もっともこれにはイニシャルで

⁹ « Sept cents sur mille : c'est la proportion exacte des suppressions effectuées par Musset. Il ne conserve, en effet, que soixante-deux pages sur quatre-vingt-huit. » (Pierre Nordon, « Alfred de Musset et l'Angleterre », *Les Lettres romanes*, 1^{er} février 1967, p. 42-43). ポール・ソウヤーもまた、オリジナル・テキストのおよそ二割が圧縮もされず、完全に削除されてしまったことを報告している (Paul Sawyer, « Musset's Translation of *Confessions of an English Opium Eater* », *The French Review*, February 1969, p. 404)。なお、Paul Peltier, « Musset et Baudelaire. À propos des *Confessions d'un mangeur d'opium* » (*Mercure de France*, 16 décembre 1918, p. 637-647) では、ボードレールとミュッセがそれぞれ、ド・クインシーの『阿片常用者の告白』をどのように読んでオリジナル・テキストを処理したのかが分析されている。

¹⁰ Spoelberch de Lovenjoul, *Étude critique et bibliographique des Œuvres d'Alfred de Musset, pouvant servir d'appendice à l'édition de souscription*, Paris, René Pincebourde, 1867. 十九頁あるこの小冊子は、彼自身により手を加えられ、以下の書に収録されることになる。*Les Lundis d'un chercheur*, Paris, Calmann-Lévy, 1894, p. 199-228. スベルベルク・ド・ロヴァンジュールの小冊子の他に、オクタヴ・ユザンヌの雑誌『書物』に、次のような論文がある。L[éopold] Derôme, « Œuvres perdues d'Alfred de Musset. Essai bibliographique », *Le Livre. Revue du monde littéraire. Archives des Écrits de ce temps*, « Bibliographie rétrospective », 10 mai 1883, p. 141-151.

A.D.M. とだけしか署名されてはいないが。この小説は何の価値もなかったので、翻訳をしても良いものにはなり得なかった¹¹。」

『英国の阿片常用者』の愛読者

ボードレールの下したとされる判断や兄ポールの証言が物語るように、『英国の阿片常用者』は決して優れた翻訳（翻案）作品と言えるものではなかった。少なくとも彼らはそう見ていた。しかし、この本を当時愛読していたと思われる同時代人もいた。例えばバルザックがその一人である。実際に、そのことを裏付ける証拠が幾つかある。

- 1) 何よりもまず、彼が原作者——トマス・ド・クインシー——の名を知らないまま、自分の書棚に『英国の阿片常用者』を所蔵していた事実を挙げることが出来る¹²。しかし、それだけではない。
- 2) 『ル・ヴォルルール』紙の一八三〇年二月五日号に、ジュール・ジャンナン『死んだ驢馬とギロチンにかけられた女（第二版）』の書評を、バルザックは匿名で発表している¹³。彼は当記事の後半部で、全二十九章あるこの作品の続きと称して、自ら創作した二章分（第三十章、最終章）のテキストを掲載した。特に「死体解剖」という題名が付された第三十章の創作テキストでは、ジャンナンの原作の後日談——無実の罪をさせられ断頭台へと送られた主人公の少女アンリエットの死体をパリの医学校の大教室で解剖するという話——が語られている。この内容は、『英国の阿片常用者』中の「一八一九年十二月」という日付の付いた、ミュッセによる不気味な創作エピソードを容易に想起させるものだ¹⁴。
- 3) 同年十一月十一日発行の『ラ・カリカチュール』誌第二号でバルザックは、「アレックス・ド・B*** 伯爵」という筆名で「阿片」という短編を発表している。その中で描かれる幻覚的ヴィジョンの幾つかが、『英国の阿片常用者』から剽窃されたものであったこと

¹¹ Paul de Musset, « Notice sur Alfred de Musset », *Œuvres posthumes d'Alfred de Musset* [1866], Paris, Charpentier, 1902, note au bas de la page 12.

¹² Judith Meyer-Petit, « Informations et nouvelles », *L'Année balzacienne*, 1990, PUF, p. 480, sous la rubrique « Maison de Balzac. Acquisitions. III. – Livre » (パリ十六区のパッシーにあるメゾン・ド・バルザック [バルザック記念館] により、前年期 [一九八九年] に購入された、バルザックの個人蔵書についての報告記事)。作家私蔵のミュッセ版『英国の阿片常用者』の実物は、現在も当館に保管され閲覧することが出来る。

¹³ Balzac, « *L'Âne mort et la femme guillotinée* », *Œuvres diverses*, Gallimard, coll. Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1996, p. 647-653.

¹⁴ Alfred de Musset, *L'Anglais mangeur d'opium*, dans *Œuvres complètes en prose*, texte établi et annoté par Maurice Allem et Paul-Courant, Gallimard, coll. Bibliothèque de la Pléiade, 1960, p. 61-63.

は既に知られている¹⁵。「阿片」で行われたこのような創作的模倣は後に、『あら皮』の前半部で描かれるあの有名なヴィジョン、ラファエルが骨董屋で不意に襲われた幻覚的ヴィジョンの描写に活かされることになる。

- 4) その翌月、同誌の十二月九日号に「アルフレッド・クドゥルー」という筆名を使用して発表した「ロマン派的連禱」という記事の中でもバルザックは、ミュッセの詩集『スペインとイタリアの物語』（一八三〇）や、マチューリン『放浪者メルモス』（一八二〇）、ノディエ『スマラ、あるいは夜の悪霊たち』（一八二一）、バイロン『異端者』（一八一三）、ジャン＝パウル「夢」（スタール夫人『ドイツ論』[一八一三]で部分訳が初めてフランスに紹介された）、そしてユゴー『オードとバラード集』（一八二六）中の詩篇『魔宴の輪舞』等、当時の彼の文学的想像力を刺激したと考えられる幾つかの作品と共に、『英国の阿片常用者』の名を、当時のロマン派文学を代表する作品の一つとして挙げている¹⁶。

ランドルフ・ヒューズが力説するように、ミュッセによる仏語訳を介して、『阿片常用者の告白』が内包する新しい文学的想像力をバルザックが間接的に享受したことは恐らく確かなことであろう。ただし、ミュッセによりド・クインシーの原作に恣意的に挿入された奇怪で陰惨なヴィジョンの数々に、一八三〇年代当時のバルザックが作家的好奇心をとりわけ刺激され、創作的想像力を掻き立てられたようだ、ということはここで強調しておかねばならない。

『ある芸術家の生活のエピソード』

そしてもう一人、ミュッセによるかなり自由な仏語翻案で『阿片常用者の告白』に当時触れていたと思われる人物がいる。『英国の阿片常用者』が出版されて二年後、一八三〇年のことだ。ベルリオーズが友人のアンベール・フェランに四月十六日付で一通の手紙を書いている。それは、大掛かりな交響曲用の音楽プログラムが完成したことを伝える旨のものである¹⁷。『ある芸術家の生活のエピソード』という題名のプログラム・ノートは全部で五つの

¹⁵ Georges-Albert Astre, « H. de Balzac et L'Anglais mangeur d'opium », *Revue de littérature comparée*, 1935, p. 755-772 ; Randolph Hughes, « Vers la contrée du rêve. Balzac, Gautier et Baudelaire, disciples de Quincey », *Mercure de France*, 1^{er} juillet-août 1939, p. 545-593 ; Balzac, *Œuvres diverses*, éd. cit., p. 1615-1616 (「阿片」*« L'Opium »*の本文は p. 814-816)。

¹⁶ Balzac, *Œuvres diverses*, *ibid.*, p. 1624 (「ロマン派的連禱」*« Les Litanies romantiques »*の本文は p. 822-827)。

¹⁷ 『回想録』では、制作経過の逸話や幻の初演（ベルリオーズは完成直後の五月に初演を行う構想を持っていたが、オーケストラの規模の問題で計画が頓挫してしまった）の経緯が伝えられている（第二十六章）。*Mémoires de Berlioz ; comprenant ses voyages en Italie, en Allemagne, en Russie et en Angleterre ; -*

楽章から成り立っていた¹⁸。それによると、完成したばかりの交響曲の各楽章には、第一楽章に当たるものを除き、それぞれに標題が付されていた。第二楽章以降を構成順に並べると次のようになる——「田園の情景」、「舞踏会」、「断頭台への行進曲」、「魔宴の夜の夢」^{サバト}。このプログラム・ノートは『ある芸術家の生活のエピソード——幻想交響曲』として、一八三〇年十二月五日にパリの国立高等音楽院^{国立高等音楽院}で、フランソワ＝アントワヌ・アブネックの指揮により初めて演奏される。その半年後、例えば「舞踏会」と「田園の情景」の順番を入れ替える等、大規模な改訂を彼の手により施された『ある芸術家の生活のエピソード——幻想交響曲』は、ローマ留学から帰国後の一八三二年十二月九日、『生への復帰』（一八三一、のちに『レリオ、あるいは生への復帰』と改名）と共に、同場所及び同指揮者で再演されることとなる。以前と同じ計五楽章の構成を採るこの交響曲の各楽章に付けられた標題は、第一楽章から順に「夢—情熱」、「舞踏会」、「田園の情景」、「断頭台の行進曲」、「魔宴の夜の夢」^{サバト}となっていた¹⁹。

『ある芸術家の生活のエピソード』は、情熱的な恋愛に破れたことで苦悶し、絶望の淵に追い込まれた一人の青年音楽家の陶醉と破滅の物語である。最愛の女性の顔があたかも取り憑いてしまったかのように頭から離れず、それに責め苛まれた不幸な主人公はある日、阿片を服用し自らの命を断とうと企てる。しかしその服用量が少な過ぎたため死には至らず、自殺は未遂に終わってしまう。昏睡状態の中、恋に破れた音楽家は阿片によりもたらされた悍ましい幻影の数々に襲われることになる。

ベルリオーズによる阿片体験

彼は晩年、鎮痛剤として阿片を常用していた、というよりは常用せざるを得ないような健康状態にあった。というのも、この時期の彼は酷い神経痛に常時、悩まされていたからであ

1803-1865 -, nouvelle édition, t. I, Paris Calmann-Lévy, coll. Bibliothèque contemporaine [1878], p. 145-148 (ベルリオーズ『回想録』、丹治恆次郎訳、白水社、第一巻、一九八一、一五三—一五六頁)を参照されたい。なお、『ある芸術家の生活のエピソード——幻想交響曲』の音楽プログラムの改訂の変遷については、現在出版されている『幻想交響曲』のフル・スコアの決定版『エクトール・ベルリオーズ新版全集』の付録中にある、綿密な調査に基づいた以下の資料を参照されたい。*Symphonie fantastique de Berlioz*, edited by Nicolas Temperley, in *Hector Berlioz, New Edition of the Complete Works*, issued by the Berlioz Centenary Committee London in association with the Calouste Gulbenkian Foundation, Lisbon, Vol. 16, Kassel ; Basel ; Tours ; London, Bärenreiter, 1972, p. 167-168.

¹⁸ *Correspondance générale* de Berlioz, Paris, Flammarion, coll. Nouvelle bibliothèque romantique, t. I, 1972, p. 318-320.

¹⁹ Berlioz, *Épisode de la vie d'un artiste, Symphonie fantastique en cinq parties, par Hector Berlioz*, dans *Le Retour à la vie, mélologue, faisant suite à la Symphonie fantastique intitulée Épisode de la vie d'un artiste*, Paris, Maurice Schlesinger, 1832, p. 3-6.

る。また、阿片を服用することでもたらされる激しい副作用にも苦しめられていた。

今は真夜中です。いつものように、寢床から手紙を出しておりますが、あなたの寢床に届くのでしょうか、例によって。あなたが最近くれた短信に私は胸が痛みました、手紙の簡潔さのうちにあなたの煩っている苦痛が垣間見られたからです…すぐにお返事を書きたかったのですが、容赦ない痛み、二十四時間続く眠気、愚かしい治療の数々、クロロホルムの塗布、そして何の役にも立たない、うんざりするような夢をふんだんにもたらす阿片チンキの入った飲み物により、それを妨げられました。我々が〔直接面会して〕握手を交わすのが今後如何に困難となることか、今ではよく想像出来ます²⁰。

ベルリオーズが青年期から薬物を摂取していたことは、以下に示していくことになるが、事実ではある²¹。しかしそれは、彼の生来の持病とも言える、過度の精神的興奮や発作症状を緩和させる為に、言わば医療用としてこれを使い始めたからに過ぎない。ベルリオーズによる阿片体験は、自己の快楽を追求する為や、芸術的靈感の枯渇を埋め合わせる為のものではなかった。

『ある芸術家の生活のエピソード』の構想が具体的な形になり始めてきた一八三〇年初頭、父親に宛てて書いた手紙の中に、阿片体験を匂わせるような記述を見付けることが出来る。「私を始終苦しめる熱病のような激しい興奮を鎮める特効薬も欲しいのですが、そんな薬は決して見付からないでしょうね、私の体質に起因するものなのですから。[…] ちっとも理解出来ないような異常な感覚に私はしばしば襲われますが、恐らくは神経の高ぶりが原因なのです、その状態は阿片のもたらす陶酔を思わせます」²²。『幻想交響曲』の初演が成功に終わり、ローマ留学に彼が赴いていた頃の奇妙な事件にも触れねばならない。女優アンリエット・スミスソンへの激しい片思いが挫折した後の交際相手マリー・モークから婚約破棄をされ、別の男と結婚することを彼女の母親から手紙で知らされた彼が逆上の余り、この三人の殺害を計画し実行に移そうとした有名な事件のことである。このことを後に振り返った彼は、憎むべき三人をピストルで射殺した後、自害し果てる為に阿片とキニーネを用意して

²⁰ フェラン宛の一八六七年一月十一日付の手紙 (*Correspondance générale de Berlioz*, éd. cit., t. VII, 2001, p. 517)。なお、同人物宛の一八六五年二月八日付の手紙 (p. 214-215)、ならびに一八六七年十月二十二日に書かれたと思われる手紙 (p. 612) も参照されたい。

²¹ 『エクトール・ベルリオーズ新版全集』に収録された『幻想交響曲』の編者による解題でもこの件について触れられており、一八三〇年の時点でベルリオーズは阿片によりもたらされる幾つかの効果を、個人的に身を以て知っていたであろうと推察している (*Symphonie fantastique de Berlioz*, éd. cit., XX 頁)。

²² 父宛の一八三〇年二月十九日付の手紙 (*Correspondance générale de Berlioz*, éd. cit., t. I, p. 310)。

いたと、『回想録』の中で告白している²³。さらに、音楽プログラム制作の三年後、そしてアンリエットとの結婚直前にあたる一八三三年八月三十日付のフェランに宛てた手紙にも注目すべき記述がある。そこでは彼女との諍いについて語られている。両者の恋愛関係における立場は、既にこの当時では逆転してしまっていた。別離を切り出されることに怯える余り、自分を疑い詰る彼女に対して、嫌気が差したベルリオーズは自暴自棄になって、「彼女の目の前で服毒することで」その愛を誇示しようとしたのである。「アンリエットのとんでもない叫び声！…高貴なる絶望感！…私の醜悪な笑い声！…ぞっとするような愛の誓いを彼女が何度も繰り返すさまを目にしながら生き返りたいという欲望！…掻き立てられる吐き気！…吐根を飲んだかのようにでした！…そして二時間もの嘔吐！…残っていたのは阿片錠剤二粒だけでした。三日間は体調がすぐれませんでした、私は死なずに済みました²⁴。」

阿片を服用しての自死の企てが果たして本気だったのか、それとも狂言だったのか、もしかしたら自分の書いた『ある芸術家の生活のエピソード』の内容を意識して自らそのパロディを演じたのか——我々には知る術がない。ただ、ベルリオーズ自身が阿片を服用して実体験した種々の幻覚的ヴィジョンの記憶を活かして、さらには少量の阿片なら服用しても死には至らず、精神の裡に幻覚現象がもたらされるのみである、といったような経験的知識を利用して、この音楽プログラムを制作した可能性は十分であろう。そしてこれから分析するように、『英国の阿片常用者』等の読書を介して獲得したかも知れない、阿片中毒に関する種々の知識や、そこで展開される幻覚的ヴィジョンの描写がその助けとなった可能性も実は否定出来ないのだ。

第二楽章「舞踏会」

ベルリオーズの『幻想交響曲』、特にその音楽プログラムに対する文学的影響については、ネルヴァル訳のゲーテ『ファウスト』がその筆頭に挙がるだろう²⁵。また、シャトーブリアン『ルネ』、ユゴー『オードとバラード集』(特に詩篇「魔宴の輪舞」^{サバト ロンド})や『死刑囚最後の日』、

²³ 「私は『幻想交響曲』の楽譜を、アブネック宛の封筒に入れ、その封筒を衣類と一緒に旅行カバンの奥にしまい込んだ。それから私は二連発のピストルを二挺用意して、二挺ともきっちり装填した。そして阿片とストリキニーネの二つの小壺を検査した上でポケットに入れた。」(*Mémoires de Berlioz*, éd. cit., t. I, p. 189 [ベルリオーズ『回想録』、前掲版、第一巻、一九一頁])。

²⁴ *Correspondance générale de Berlioz*, éd. cit., t. II, 1975, p. 111-112.

²⁵ *Mémoires de Berlioz*, éd. cit., t. I, p. 145, 147, 168-169 (ベルリオーズ『回想録』、前掲版、第一巻、一五三、一五五、一七三頁)や、ベルリオーズとゲーテ文学の関係を論じた研究、例えば最近のものだと Béatrice Didier, « Berlioz et Faust », *Revue d'histoire littéraire de la France*, 2004/3, Vol. 104, p. 561-573 (特に p. 562-563) を参照されたい。なお、『回想録』第三十一章では、再演の前日に彼に会いに来たリストに、これを読むよう勧めている場面が描かれている。

そしてド・クインシー『阿片常用者の告白』も同様である²⁶。さらに、十九世紀前半のフランス・ロマン主義時代における文学と芸術の交流状況を鑑みれば、他の芸術家たちと同様、当時のベルリオーズが創作の面において、シェークスピア『ハムレット』やバイロン『チャイルド・ハロルドの巡礼』、E. T. A. ホフマン『夜曲集』、あるいはルイス『僧侶^{マンク}』等の影響下にあったであろうことも想像に難くはない²⁷。最近では、ノディエ『スマラ、あるいは夜の悪霊たち』など、同時代の幻想文学作品と『幻想交響曲』との関連性を究明する研究や、ルソー『告白』に代表されるような、十八世紀末から十九世紀のヨーロッパにおいて流行した、告白形式の自伝文学の影響を探るものも現れている²⁸。

『英国の阿片常用者』に関しても、当然のことながら、これまでにしばしば取り沙汰されてはきた。しかし、ミュッセの翻案による影響を直接に示唆するような言質がベルリオーズによって残されていないこともあり、J.-G. プロドムやアレシア・ヘイターの研究以外で大きく扱われることは稀であった²⁹。とはいえ、『ある芸術家の生活のエピソード』には『阿片常用者の告白』から、というよりは『英国の阿片常用者』から着想を直接的に得たと思われる部分が明確に存在する。特に、この音楽プログラムの第二、第四楽章に付された解題を分析してみたい。

第二楽章「舞踏会」の解題は、賑やかな舞踏会で主人公の芸術家が、ある日忽然と姿を消してしまったかつての恋人の姿を見掛ける、といった内容になっている。フェラン宛書簡(一八三〇)では第三楽章の標題となっている、「舞踏会」に関する記述は以下のようなものである。

彼〔芸術家〕は舞踏会に出席するものの、そのお祭り騒ぎを彼は気晴らしに楽し

²⁶ « Appendix I. Literary Sources », dans *Symphonie fantastique* de Berlioz, éd. cit., p. 191-193. ユゴー『死刑囚最後の日』からの影響については、例えばピエール・シトロンにより次の書で簡単ではあるが言及されている。*Dictionnaire Berlioz*, sous la direction de Pierre Citron et Cécile Reynaud avec Jean-Pierre Bartoli et Peter Bloom, Fayard, 2003 (« *Symphonie fantastique* » の項)。

²⁷ ベルリオーズのみならず、十九世紀のフランス・ロマン主義芸術家たちは、大小の差はあれど、これらの作品の影響下にあったことは言うまでもない。Joseph-Marc Bailbé, « L'époque de Berlioz : un moment du romantisme » (*Revue d'histoire littéraire de la France*, 2004/3, Vol. 104, p. 515-526) では、一八三〇年代から一八五〇年代頃までのロマン主義文学と芸術における様々な動向とベルリオーズの関係が追究されている。またデームリングは、この音楽プログラムとルイス『僧侶(マンク)』との間に類似性が存在することを示唆している(ヴォルフガング・デームリング『ベルリオーズとその時代』、池上純一訳、西村書店、シリーズ「大作曲家とその時代」、一九九三、八四頁)。

²⁸ 前者に関しては、Marianna Ritchey, « Echoes of the Guillotine : Berlioz and the French Fantastic », *19th-Century Music*, Vol. 34, n° 2 (Fall 2010), p. 168-185 を、後者に関しては、Francesca Brittan, « Berlioz and the Pathological Fantastic : Melancholy, Monomania, and Romantic Autobiography », *ibid.*, Vol. 29, n° 3 (Spring 2006), p. 211-239 (特に p. 233-239) を参照されたい。

²⁹ J.-G. Prod'homme « Musset et Berlioz. *L'Anglais mangeur d'opium* et la *Symphonie fantastique* », *Mercure de France*, 1er janvier 1940, p. 93 ; Alethea Hayter, *Opium and the Romantic Imagination*, London, Faber and Faber, 1968, p. 303.

むことが出来ない。さらに、いつものイデー・フィクスに再び襲われ彼の心は乱される、煌めくようなワルツの合間に流れる愛おしいようなメロディーに、彼の胸は激しく高鳴る³⁰。

ド・クインシーによる原作には存在しないミュッセの創作エピソード、つまりアンナとの舞踏会での再会の場面を次に紹介する。アンナと離れ離れになった後の「一八一〇年の冬のある日」、友人の若い士官にオックスフォード通で出くわした主人公は、気晴らしにと「フランス風の舞踏会」に誘われる。「今晚阿片を摂っていれば、より気晴らしが出来ようものを」と独り言ちしていると、参加者の雑踏と喧騒の中、「C 卿」に手を引かれ、若い衛兵たちに取り巻かれながら入場して来たその夫人を目にする。

彼女だ、私は心の中で言った、彼女を目にしたのだ。私は立ち上がり、人混みの中に虚しくも彼女を探した。奇妙なヴィジョンであることよ！人違いをしたのだろうか？アンナよ、私がこんな風に君と再会するに違いないと予言する者がかつていたなら、そいつを間違い呼ばわりしていただろうが³¹。

ただ、一八三一年六月頃に改訂が施され、翌年の再演時にシュレザンジェ書店により印刷・配布された音楽プログラムにある第二楽章の解題になると、彼女の姿がイデー・フィクスとなって主人公の芸術家を始終苛む状況を描写することに力点が移動してしまい、フェラン宛書簡にある記述内容と比べて、華やかな舞踏会の喧騒の中での劇的な再会、という主題は後景へと若干ながら追いやられている。なお、同書店から一八四五年に出版されたフル・スコアに添えられた音楽プログラムでの「舞踏会」の解題は、一八三二年のテキストが一切の変更なしにそのまま採用されている³²。

芸術家は極めて多様な生活状況に置かれてしまう、お祭り騒ぎの最中に居るかと思えば、美しい自然の景色をじっと穏やかに眺めていたりするのだ。しかし至る所で、街中でも、田園でも、愛おしい〔女の〕イマージュが目の前に現れて彼の魂を動揺させる³³。

³⁰ フェラン宛の一八三〇年四月十六日付の手紙（*Correspondance générale de Berlioz*, éd. cit., t. I, p. 320）。

³¹ Alfred de Musset, *L'Anglais mangeur d'opium*, éd. cit., p. 38-39.

³² 今日では定本となっている『エクトール・ベルリオーズ新版全集』では、一八四五年に初めて発表されたフル・スコアならびに音楽プログラムが採用・収録されている。

³³ Berlioz, *Épisode de la vie d'un artiste, Symphonie fantastique en cinq parties*, éd. cit., p. 4 ; *Symphonie fantastique de Berlioz*, éd. cit., p. 3. 『回想録』第三十四章で彼が自ら語っているように、この「舞踏会」部分の楽曲改変はローマ留学当時に既に企図されていたようである（*Mémoires de Berlioz*, éd. cit., t. I, p.

第四楽章「断頭台への行進曲」

フェラン宛書簡での記述はこうになっている。

発作的な絶望感に襲われた彼は、阿片で以って服毒自殺をする。しかし彼の命を奪う代わりに、この鎮静剤は彼にぞっとするようなヴィジョンを見せる、その中で彼は愛する女を殺してしまい、死刑を宣告され、自身の刑の執行に立ち会った気になってしまう。断頭台への行進曲、死刑執行人や兵士、民衆らが作る大行列。最後に、今際の際に愛を名残惜しむかのように、メロディー^{旋律}がまた再び現れるが、死をもたらず一撃により断ち切られてしまう³⁴。

余り言及されることはないのだが、イタリアからの帰国直後に行われた再演時のプログラムの第四楽章の標題は、当初の「断頭台への行進曲」« Marche au supplice » から「断頭台の行進曲」« Marche du supplice » に変更されていた。『エクトール・ベルリオーズ新版全集』にある、音楽プログラムの異文研究^{ヴァリアシオン}によると、一八三〇年五月に予定されていた幻の初演以降、当楽章の標題は「断頭台の行進曲」とされ、同年の初演時もこれを使用していたようだが、一八四五年のフル・スコア出版の際に「断頭台への行進曲」という標題に戻された³⁵。

この第四楽章の解題について、一八三二年の音楽プログラムにあるものと『幻想交響曲』の初版フル・スコアに添えられたものとの間には、テキスト・レヴェルで若干の差異はあるものの、重要と思しき点は認められない。だが、これらをフェラン宛書簡にある記述と比べると、標題説明の視点もより客観化され、さらには自罰的な思考論理が一層強調されていることが判る。加えて、ベルリオーズにより用いられた、全曲を貫く中心的なモチーフ^{動機}を表す「イデー・フィクス」^{固定楽想}という音楽専門用語が、「メロディー^{旋律}」という語に代わり使用されている点が目を惹く。ここでは『英国の阿片常用者』の出版年に近い、一八三二年の再演時のプログラムにある解題を見てみたい。

最愛の女が自分の愛に応えてくれないばかりでなく、自分のことを理解出来ず、そしてさらには彼女がそれに値しないという確信を得たその芸術家は、阿片で以っ

187 [ベルリオーズ『回想録』、前掲版、第一巻、一八九頁]。

³⁴ フェラン宛の一八三〇年四月十六日付の手紙 (*Correspondance générale de Berlioz*, éd. cit., t. I, p. 320)。

³⁵ *Symphonie fantastique de Berlioz*, éd. cit., p. 168-169.

て服毒自殺をする。命を奪うのにはこの鎮静剤の服用量は余りに少な過ぎた為、彼は眠りに落ちてしまい、それと共に訪れた世にも恐ろしいヴィジョンの数々に襲われる。愛していた女を殺してしまい、死刑を宣告されて刑場へ連れて行かれ、*自分自身の刑の執行に立ち会う夢*を彼は見る。ある時は陰気ではあるが荒々しい、またある時は華々しくて荘厳な行進曲の楽音に合わせて行列は前進する、その行進曲の流れる中、耳を聳せんばかりの大音響が炸裂し重々しく鈍い足音が間髪を容れず続く。行進曲が終わるところで、*今際*の際に愛を名残惜しむかのようにイデー・フィクスで構成された最初の四小節が再び現れるが死をもたらす一撃により断ち切られてしまう³⁶。

死をもたらすような大音響が鳴り響く中を荘重に前進する、あたかも葬列の如き大行列、という大変印象的なヴィジョンの描写に芸術的靈感を与えたと思しきテキストが、やはり『英国の阿片常用者』の最終場面において見出せる。ミュッセが描いた、あたかも人類の命運を掛けた一日に相応しいような、英雄的で荘厳な大行進のヴィジョンに、恐らくベルリオーズは創作的好奇心を刺激されたのであろう。

その夢はある音楽から始まった、夢の中で今日しばしば耳にする曲である。私の身に起こるに違いないことを告げてくれているようなハーモニー。行軍する大部隊が立てる物音が、あたかも戴冠式の祝歌の序曲の如く、力強い行進曲となる。記念すべき一日の朝である気がした。人類にとって危機ではあるが希望の一日、そのとき人類は謎の災厄に苦しめられるも、何かしらの物凄い窮地に対して立ち向かう、そんな一日³⁷。

『回想録』第五章

『ある芸術家の生活のエピソード』からは多少離れてしまうが、ベルリオーズの『回想録』の中に、青年期のパリでの医学修行のことを振り返った注目すべき記事がある。「一八二二年」という日付が冒頭に記されたその逸話の内容は、次の通りである。医業を営んでいた父との約束を果たすべく、医学修行の為に上京したベルリオーズは、ある日のこと、研究材料の死体が手に入ったことを聞きつけた友人と共に、慈善病院の解剖学講義用の

³⁶ Berlioz, « Marche du supplice [quatrième partie] », *Épisode de la vie d'un artiste, Symphonie fantastique en cinq parties*, éd. cit., p. 5.

³⁷ Alfred de Musset, *L'Anglais mangeur d'opium*, éd. cit., p. 63.

大教室へと赴いた。死体を見るのは、彼にとってこれが初めての体験であったようだ。

死体置き場の恐ろしい光景、切断された手や足、皺苦茶に歪んだ死人の顔、頭皮からはみ出た頭蓋骨、血だらけの汚水槽の間を縫って歩いて行く。発散してくる酷い臭気、雀が群がって肺の切れ肉を争ってつついている。隅の方で鼠が集まって血に染まった脊椎の骨を齧っている。ついに私は恐怖の余り大教室の窓から飛び出して、全速力で走りに走り、息せき切って部屋へ戻った。死人が恐ろしい行列を作って後ろから足元へ纏い付いてくる感じだった³⁸。

次に紹介する『英国の阿片常用者』の中の一節は、「一八一九年十二月」という日付を持つ医学校でのあのエピソードの一部である。ということは、当然ながらこの部分もミュッセの自伝的創作テキストということになる。

教授は来ていなかったが、私の目から死体を隠していたあの布が持ち上げられてしまうのを待ちわびていた。ついにその瞬間がやって来た。思っていたより遥かにぞっとするような何物かを見るつもりだった。授業が始まった。私は、気分が悪くなった学友たちをあざ笑っていた。しかし、手術用のメスが死体の皮膚に入り始め、開胸部の辺りをゆっくりと流れていた黒ずんだ血が物凄い臭気を発し始めた時、私は一目散に逃げ出してしまった³⁹。

先程も述べたように、『ある芸術家の生活のエピソード』に対する文学的影響に関しては、これまで様々に語られてきた。ゲーテやユゴー、シャトーブリアンについてはさほど疑義も生まれまいであろう。だが、ド・クインシー『阿片常用者の告白』からの直接的影響に関しては、少なくとも以上の考察から、そのように考えるよりも寧ろ、ミュッセの伝語訳を介して間接的にその影響を受けたと言い直した方が良いと考えられる。さらに言うなれば、『幻想交響曲』の音楽プログラム制作時のベルリオーズの創作的好奇心を惹き、芸術的靈感を彼に与えたのは、主にミュッセにより創作されたテキストであったと考えるべきであろう。

ベルリオーズとミュッセ

³⁸ *Mémoires de Berlioz*, éd. cit., t. I, p. 24-25 (ベルリオーズ『回想録』、前掲版、第一巻、四四頁)。

³⁹ Alfred de Musset, *L'Anglais mangeur d'opium*, éd. cit., p. 61.

同時代人であるベルリオーズとミュッセとの間に交友関係が存在していたのかどうかという疑問もあるだろうが、その可能性は低いと思われる⁴⁰。ただしベルリオーズは一度だけ、『英国の阿片常用者』の仏語訳者としてのミュッセではなく、当時有名だった文学者、かつては時代の寵児であった詩人としてのミュッセについて言及している。ミュッセの死の数日後、自分の姉に宛てた一通の手紙の中で、この作家の晩年を襲った数々の不幸を嘆き、その死に哀悼の意を彼は表している。ベルリオーズはミュッセの非社会的な部分や気難しい性格を必ずしも好んではいなかったようだ。それでも『阿片常用者の告白』をフランスに紹介した人物としてではなく、自分と同時代に生き、人気と名声を博した詩人として、皮肉な口調ながらもミュッセをある程度評価していたことが窺い知れる。

アカデミー・フランセーズは真の詩人、アルフレッド・ド・ミュッセを失ったばかりです。アプサン酒への、というよりはこの飲み物によりもたらされる酩酊への執着が原因で彼は死にました。何て不憫な人生の擦り減らし方なのでしょう！愛想などほとんどない、狷介な人物でした！私は彼が苦手でした。ひどく不愉快に感じますが、驚き呆れてしまうような人間を世の人は愛したがるのでしょうかね⁴¹。

ミュッセの『英国の阿片常用者』は、兄ポールが語ったように、ド・クインシーの原作に対して忠実な翻訳とは決して言えない作品であった。それにも関わらず、『阿片常用者の告白』が内包する新たな文学的想像力の可能性を、この仏語翻案は当時のバルザックに間接的に伝えた。しかし、それが何も文学の世界だけに限られた現象でなかったことは、これまでに分析・検討してきたことから明らかであろう。ミュッセによるかなり大胆な翻案は、『ある芸術家の生活のエピソード——幻想交響曲』を制作したベルリオーズにも少なからず影響を及ぼしたと考えられる。兄のポール曰く、誰からも忘れ去られてしまったミュッセの文壇デビュー作は実際のところ、一八三〇年前後のベルリオーズの創作的想像力を大いに刺激したのである。

⁴⁰ J.-G. Prod'homme, « Musset et Berlioz. *L'Anglais mangeur d'opium* et la *Symphonie fantastique* », art. cit., p. 100.

⁴¹ 姉 [アデル・シュア] 宛の一八五七年五月七日付の手紙 (*Correspondance générale de Berlioz*, éd. cit., t. V, 1989, p. 464)。